

に描かれた寓話的動物物語図も、アングロ・サクソン人のデザイナーによって加えられた(あるいは本来予定されたものから改変された)ものであるという立場に立ち、その上で、アングロ・サクソンの職人が関与した寓話には、ノルマン人に対する批判的なメッセージが暗に込められているのではないかと結論付けている。この論題に対して、ここで十分な議論が尽くされたとは言いがたいものがあるが、非常に興味深く刺激的な内容の研究であり、今後のさらにより詳細な研究が俟たれる。

Robert E. Bjork の“N.E.S. Grundtvig's 1840 Edition of the Old English *Phoenix*: A Vision of a Vision of Paradise”は、*Beowulf*研究の最初期である19世紀前半に、*Beowulf*のデンマーク語訳を発表し、初めてこの詩の内容に関する基本的理解を示した人物として知られている、デンマークの愛国的(右翼的)詩人であり文献学者であるGrundtvigが、1840年に出版した古英詩*Phoenix*のエディション(に付け加えた、デンマーク王に対するdedicationやdedicatory poem、*Phoenix*の韻文訳、最後に付け加えたconcluding poem)に、彼の愛国的・右翼的、歴史的、美的、宗教的な思想が如何に表されているかを論じている。それと同時に、B. Thorpeをはじめとする、同時代のイギリスの学者との間での国家主義的感情の絡んだせめぎ合い等、国家主義的な感情が当時の文献学研究の世界に及ぼした影響についても論じられており非常に興味深い。

Jane Roberts の“Hrothgar's 'admirable courage'”は、*Beowulf*研究においてこれまでもしばしば問題となってきた646b行のahlæcanという語の解釈を中心に据え、この語をDOE (*Dictionary of Old English*)に定義されたようにawesome opponent, ferocious fighterと解釈し、この語を含む文章全体を、従来よく考えられてきたようなHrothgarの臆病な行動を描写したものとするのではなく、勇気ある行動を描写したものとして解釈すべきであるとしている。

Antonette diPaolo Healey の“Questions of Fairness: Fair, Not Fair, and Foul”、Janet Bately の“Bravery and the Vocabulary of Bravery in *Beowulf* and the *Battle of Maldon*”、および、Roberta Frank の“Sex in the *Dictionary of Old English*”は、いずれも古英語語集の意味やニュアンス、あるいはそれを現代英語で如何に表現するかということと関連する論文であるという点で共通している。HealeyはOE fæger (ModE fair)、Batelyは*Beowulf*と*The Battle of Maldon*に用いられたcourageあるいはbraveryを表す語、Frankは性行為等と関連するfour-letter Anglo-Saxon wordsを例に取り、古英語の単語や言い回しには、当時の言語や文化や思考法に基づいた独特の意味やニュアンスや表現の仕方が認められるということを示すと同時に、これを現代英語で表現しようとするときに伴う難しさをも示している。

以上、本書に所収された全ての論文の内容を簡単に紹介してきたが、追悼論文集という性格上、全体的なまとまりはあまりなく、これを評するに際しても、的を絞りにきれいなものとならざるを得なく、結果的に本書の魅力を十分伝えることが出来たとは言いが、最後に今一度全体を見渡してみれば、本書には、「伝統的な」論題を論じたものから、最

近の研究動向に沿った研究まで、また、これまでである程度一般的に知られてきたことを、新たな具体例によって再確認するような性格の研究から、これまでエディションとして出版されていなかった作品や文書の初のエディション化を初めとして、これまであまり研究されてこなかったところに新たな研究の題材を開拓するような研究まで、実に様々な方向性や性格の研究成果が収められているというのが最大の特徴であると言えるだろう。そしてこれは、本書の目的、即ち、“to offer a snapshot of current scholarship in the field and to stimulate further discussion” (p. 5) に十分かなった内容であると言えることが出来、結果として、全体的なまとまりがあまりないところが逆に本書を目的にかなった意義あるものとしていると言えるだろう。

横浜市立大学

—唐 澤 一 友—

ノーム・チョムスキー著／福井直樹・辻子美保子訳 『生成文法の企て』

岩波書店 2003年 365 pp.

Noam Chomsky, *Generative Enterprise Revisited*

Berlin: Mouton de Gruyter, 2004. xiii+211pp.

1. はじめに

本書評は、ノーム・チョムスキー著／福井直樹・辻子美保子訳『生成文法の企て』と、Noam Chomsky (2004) *The Generative Enterprise Revisited* 両書のジョイント書評である。『生成文法の企て』は、1979年11月及び1980年3月に行われたノーム・チョムスキーとリーニ・ハオブレックス、ヘンク・ヴァン＝リームズダイクとの対談、Chomsky, N. (1982) *The Generative Enterprise*, Dordrecht, Foris Publisherの全訳である「生成文法の企て」に、2002年秋に行われた訳者自身によるノーム・チョムスキーとのインタビューである「21世紀の言語学」を合わせ、さらに訳者による序説を加えたものである。「生成文法の企て」については、旧訳(「生成文法の企て」阿部泰明・福井直樹・川崎典子訳『月刊言語』1984年9月号～1985年9月号)が存在するが、このようにまとまった形のは初めてであり、さらに訳もほぼ全面的に改訂されている。「21世紀の言語学」は、訳者自身によるノーム・チョムスキーとの対談である点を考えると、翻訳と言うよりは日本語版と言う方がより適切であろう。両書の出版年からもわかるように、この『生成文法の企て』の出版を契機に、いわばその英語版として出版されたのが、*The Generative Enterprise Revisited* である。

*The Generative Enterprise Revisited*では、1982年出版の*The Generative Enterprise*が再録され、それに福井・辻子両氏によるインタビューである*Linguistics in the 21st Century*、日本語版での訳者序説の英語訳、さらにノーム・チョムスキーによって新たに書き下ろされたまえがきを加えられている。

両書の構成は以下の通りである。「生成文法の企て」(*The Generative Enterprise*)は、第1部「言語学について」(*On Linguistics*)と第2部「文法について」(*On Grammar*)から構成されている。第1部は、第1章「言語と認知」(*Language and Cognition*)、第2章「言語学における説明」(*Explanation in Linguistics*)、第3章「言語学という分野」(*The Field*)から、第2部は第1章「歴史的展望」(*A Historical Perspective*)、第2章「形式文法の諸問題」(*Issues in Formal Grammar*)、第3章「核と周縁」(*Core and Periphery*)から構成されている。「21世紀の言語学」(*Linguistics in the 21st Century*)は、第1章「言語学」(*Linguistics*)、第2章「言語学とその他の諸科学」(*Linguistics and Other Sciences*)、第3章「将来への展望」(*Prospects for the Future*)から構成されている。両書は対談に基づいていることも手伝って内容が非常に多岐にわたっており、この小論ですべてについて言及することは不可能である。そこで、以下では特に重要であると思われる言語理論の発展、言語理論の評価、言語学と関連諸科学との関わりとの3点に焦点を絞って、両書の内容を概観する。

2. 概要

2.1 言語理論の発展について

言語理論の発展については、「生成文法の企て」第2部第1章において、それまでの時代を担う重要な著作の理論的意義について述べられている。『統語構造』(1957)は元来MIT学部学生用の講義ノートであり、そこで中心的な話題になっている議論(有限状態オートマトンから文脈自由文法、そして変換文法へと続く自然な流れが描かれている)は、言語学にとっては周辺のものであることに注意すべきだと指摘されている。そして、オートマトンや弱生成力の議論に関わらず、変換文法のみが言語学における真の問題(すなわち、説明的妥当性)に解決策を与えることができると主張されている。『現在の諸論点』(1964)では(移動規則に従う)有界理論に関する諸条件が提案されたが、それをRoss(1967)が島の条件として発展させ、さらに『変換に課される諸条件』(1973)では、移動規則が持つ一般的特性である下接性へと飛躍的に前進した。ピサの枠組み(1981)は、束縛理論において同様の前進が見られたが、下接性と束縛理論の間には余剰性があることが知られており、これらにさらに空範嚙原理などを結び付けるもっと一般的な統一原理を目指すべきであると主張されている(この路線での研究として、Aoun(1985)、Kayne(1983)などがある)。以上のように言語学はより説明的妥当性の高い理論構築を目指し発展してきた。しかし、言語学は(その当時)まだいかなる知的革命も経験しておらず、最初の革命の兆しがようやく見え始めた段階であると述べられている。

その後、言語学において知的革命が起こったわけであるが、その革命の詳細が「21世紀の言語学」第1章において述べられている。1980年頃から現在までの20年間に起こった変化は、類型論的に異なるありとあらゆるタイプの言語に関しての深みをもった研究が爆発的に増加したという点である。このような研究の爆発的増加は、原理・パラメータ理論によってもたらされたものである。原理・パラメータ理論は、記述的妥当性と説明的妥当性との緊張関係というパラドックスに対して解決策を提供した。それにより、それまであらゆる言語研究の核となってきた規則とか構文とかいう概念を事実上破棄し、それらは分類上の人工物であるとした点において、知的革命と呼ぶことのできる発展であったと述べられている。そして、記述的妥当性と説明的妥当性との緊張関係に対しての解決策が見出されたことにより、言語理論はどのようなものであるかという問題を追究する極小主義プログラムへと繋がることになる。極小主義プログラムでは、生成文法が当初の目標として設定した説明的妥当性のレベルを超えて、言語機能の諸特性に原理的説明を与えるという、言語機能の説明理論へと大きく踏み出すものであると述べられている。原理的説明を生み出す源としては2つあると考えられる。1つはインターフェイス条件である。言語は感覚・運動系と概念・意図系の2つのシステムとインターフェイス表示を介して接しているが、インターフェイス条件とはこれら2つのシステムが言語に対して課している要求のことである。もう1つは、言語外(有機体外)の諸条件であり、対象が言語という計算システムであるので、計算効率性原理等の計算上の諸原理が関わっていると考えられる。極小主義プログラムは、インターフェイス条件と計算上の諸原理によって、言語機能の特性に原理的説明を与えることが可能かどうかを検証するという試みであると述べられている。以上のように、生成文法の誕生以来、言語理論は変化してきたが、理論というものは健全であるためには変化していくものだということが、言語学ではあまり理解されていないという現状が指摘されている。1つの理論が提案され、検証され、そして乗り越えられることが分野への貢献になると主張されている。

2.2 言語理論の評価について

言語理論の評価については、「生成文法の企て」第1部第2章において、形式言語の階層性や弱生成力・強生成力は言語理論の評価基準とはならず、説明的妥当性のみが基準であるべきだと強調されている。説明的妥当性の問題は、ある特定のデータ(例えば日本語)を基にしてどのように文法が選ばれるのかという「投射の問題」と考えられ、この問題の解決のために言語理論に要求されているのは、接近可能性という概念である。すなわち、言語理論は、ある特定のデータを与えられた時に、接近可能性という基準に基づいて文法を分散させることにより、接近可能な文法の総数を減ずるようなものでなくてはならない。「21世紀の言語学」の第1章で詳しく述べられているが、原理・パラメータ理論以前の言語理論では、接近可能な文法が複数存在していたために、その中の1つの文法を選択する評価尺度が必要であった。その評価手順は有限個の手続きからなる発見の手順ではあった

が、要求される作業量は天文学的で実行可能ではなかった。そして、「投射の問題」はパラメータの値を決めることであるとする原理・パラメータ理論により、ある特定のデータが与えられた時に接近可能な文法は1つだけとなり、文法の評価尺度は必要なくなったと述べられている。

「生成文法の企て」第1部第2章では、言語理論と最適性についても述べられている。科学者は理論に最適性を求めるが、これは最適性という概念に何か真理があるという殆ど神秘主義的とも言える信念であるとしている。しかし、生物学的システムは、多くの冗長性・余剰性を含んでいることがわかっている。言語理論から冗長性・余剰性を排除してこうという考え方は、極めて生産性の高い指導的な理念ではあるが誤っているかもしれないと、この時点では立場を留保している。ここでの論点は「21世紀の言語学」第1章での、2種類の極小主義（「方法論的極小主義」と「実質的極小主義」）の中で再び取り上げられている。「方法論的極小主義」とは、最適な理論を求める方法論的態度であり、これは上記のように「生成文法の企て」においてすでに指摘されている考え方である。「実質的極小主義」とは、探求の対象そのもの（すなわち、人間の言語機能）がある種の最適性を有していると主張する考え方であり、「生成文法の企て」の時点では留保していた点が、ここでは明確に主張されている。

2. 3 言語学と関連諸科学との関わり

言語学と関連諸科学との関わりについては、「生成文法の企て」第1章及び「20世紀の言語学」第2章において述べられている。言語学と哲学との関わりについて、人間の知識の本質を研究するための理論的枠組みを提供するという点が言語学と哲学との最も重要な接点であるが、残念ながらそのような哲学研究は殆ど見られないと述べられている。人工知能研究と言語学の関わりについて、知覚現象に説明を与える表示システムと表示レベルを生み出す計算モデルを扱った Marr and Nishihara (1978) に言及し、言語学の営みと類似しているこのような計算理論レベルでの研究こそが人工知能研究のあるべき姿であると指摘している。言語学と数学との関わりについて、言語学においては分野の全面的数学化が依然として成し遂げられてなく、言語学と数学との外在的結び付きは見られない。これは数学が基本的には極めて単純なものに関する研究である故である。形式言語学の初期において数学との外在的結び付きが見られたのは、弱生成力というきわめて単純な対象を研究していたからであって、強生成力のような難しい構造に関する研究の数学化は不可能であると指摘されている。他方、言語学と数学には、内在的に結び付きが存在する。言語機能と数機能は、回帰的枚举及び離散無限性という共通の特性を備えている。このことから考えると、数機能というのは、言語機能を取ってきて、回帰的枚举という特性のみを残して他の言語に特有な諸特性を全て取り除いたときに得られるものではないかと示唆されている。進化論との関わりについて、人間の感覚・運動系及び概念・思考系は基本的に霊長類一般が共有しているものと根本的には違いはなく、これらのインターフェイス・システ

ムを、回帰的規則を用いて離散無限を扱うような計算能力により結び付けたことにより、自由な思考を生み出す能力が生まれ、それが生物界での人間の独自性を生じさせているのではないかと示唆されている。そして、この能力は自然選択によって生じたとは考えられず、脳が非常に複雑になると、離散無限性を備えたシステムを内包せざるを得ないのではと推論している。言語学と進化論との関わりについての議論は、「生成文法の企て」第2部第3章と「21世紀の言語学」第1章で話題となっている言語機能の「領域固有性(自律性)」と深い関連がある。言語機能の「領域固有性」には、強い解釈と弱い解釈の2通りの解釈がある。強い解釈とは、言語機能は他の認知能力には還元できないような固有の特性を備えた心の器官であるという解釈である。これに対して、「極小主義の強いテーゼ」が維持されるならば、言語の領域固有性とは、言語に固有ではないような諸要素の全体的組織化に還元できるという弱い解釈になると指摘されている。すなわち、個々の構成要素は領域固有でないが、システム全体としては自律的であるという解釈であり、言語に固有な領域はインターフェイス間の回帰的規則による結び付きのみであると主張されている。脳科学との関わりについて、「真の証拠」は言語学ではなく脳科学からしか得られないという主張がある。しかし、これは無意味な主張であり、化学に対して向けられていた批判、すなわち物理学的な根拠がないのでそのモデルにいかなる実在性も与えることができず、化学は真の科学ではなく計算法であるという批判と同種のものであると指摘している。脳科学はきわめて重要な分野になることは間違いないが、現段階では一般理論の内容に乏しいと指摘している。

3. まとめ

以上、言語理論の発展、言語理論の評価、言語学と関連諸科学との関わりの3点に絞って両書の内容を概観してきたが、上記で述べることでできなかった話題の中にも、言語学とオートマトン理論の関わり、言語理論の原始語と認識論の先行性、実在論、二元論（所謂「心身問題」）、パラメータの存在とミニ・マックス問題など、興味深い話題が多々存在する。両書の議論の大半は、理論言語学は何を目指しているのか、そして理論言語学を諸科学の中でどのように位置付けるべきなのかという、言語理論そのものについての議論が中心であるが、言語分析の技術的な問題についての興味深いアイデアも多々指摘されている。特に、「生成文法の企て」の中で議論されている、Lasnik and Kupin (1977) の縮小句標識についての議論（これを発展させた研究に Goodall (1987) がある）、Chomsky and Halle (1968) 及び Kean (1975; 1981) の有標性理論の議論は、極小主義の視点から見直すことにより新たなアイデアへと結びつく可能性があると思われる。さらに、言語研究を進めていく上であるべき姿勢について述べられているのも対談ならではであろう。例えば、知的興味をそそり遠大で大胆なアイデアに出会った時、まず反例を探そうとするのではなく、資料を再分析してみたり、そのアイデアに変更を加えてみたり、ある範囲ではそれがうまく行くようにするという姿勢が重要であると述べられている。さらに、論文

を読んだり発表を聞いたりする際、著者・発表者が何について語っているのか、何を一体狙っているのかを理解しようとすることや、その人がもつと良い道具立てを与えられたならば、自分のアイディアをどのように発展させたのだろうかと思像することが大切であるとも述べられている。

両書は、理論言語学の研究者のみならず、哲学・心理学・コンピュータ科学など言語学関連分野の研究者、あるいはチョムスキーの政治思想に興味を持ち理論言語学とはどのような学問分野であるのか興味を持っている人にとっても、とても有益であると思われる。対談に基づいているおかげで、他の理論言語学の文献よりは読みやすいものの、理論言語学を専門としない読者にとっては理解が難しい点も多々あるように思われる。そのような場合は、理論言語学の主張や論点についてとても明快にまとまっている訳者による序説が大いに役に立つと思われる。

参考文献：

- Aoun, J. 1985. *Generalized binding*. Dordrecht: Foris.
 Chomsky, N. and M. Halle 1968. *The sound pattern of English*. New York: Harper and Row.
 Goodall, G. 1987. *Parallel structures in syntax*. Cambridge: Cambridge University Press.
 Kayne, R. 1983. *Connectedness and binary branching*. Dordrecht: Foris.
 Kean, M.-L. 1975. *Theory of markedness in generative grammar*. Doctoral dissertation, MIT.
 Kean, M.-L. 1981. On a theory of markedness: some general considerations and a case in point. In *Theory of markedness in generative grammar*, ed. by A. Belletti, L. Brandi and L. Rizzi, pp. 559-604. Pisa: Scuola Normale Superiore.
 Marr, D. and H.N. Nishihara. 1978. Visual information processing: artificial intelligence and the sensorium of sight. *Technology Review* 81.1.
 Lasnik, H. and J. Kupin. 1977. A restrictive theory of transformational grammar. *Theoretical Linguistics* 4, 173-196.
 Ross, J. R. 1967. *Constraints on variables in syntax*. Doctoral dissertation, MIT.

明治大学

— 石 井 透 —

長谷川欣佑著『生成文法の方法—英語統語論の仕組み』

研究社 2003年 301 pp.

1. 本書は、生成文法が半世紀にわたり開発した精緻な構文分析の方法に基づき、著者自身が解明した英語統語論の成果がまとめられたものである。本書の特色は、実証的な文法研究の重要性が随所に示されている点、言語事実と一般理論との相互のフィードバックの

必要性が具体的な統語分析により例証されている点にある。それは同時に近年の生成文法研究に見られる傾向、例えば実証的裏付けのない過度の抽象化、理論と経験的事実の健全な相互依存関係の欠如など、に対する警鐘ともなっている。

本書の構成は、大きく第I部の総論と第II部の特論から成っている。総論の第I章から5章は、生成文法の統語分析の方法を説明したものであり、規則性の発見、移動と削除の相違、繰り上げ変形の必要性、動詞句や名詞句の構造などが、著者独自の視点から解説される。第6章から9章は、特に一般原理に関わる問題を扱ったもので、一般 A-over-A 原則、Wh- 句移動の制約、照応関係、Xバー理論の問題点などに関する精緻な議論が展開される。第II部の特論は、これまで議論が多く決着がついていない統語論のトピックに関する研究である。目的語への繰り上げ、that-trace 現象、寄生空所構文などについて、従来の研究の問題点が指摘され、統語現象における意味的制約の必要性、また統語論と音韻論の接点に関する興味深い考察がなされている。最終章は、近年通説とされつつある素性照合の理論やフェイズ (phase) への批判的考察である。

著者の立つ基本的立場は、いかに現在「主流をなす理論」であろうとも、また「野心的かつ刺激的なプログラム」であろうとも、経験的事実により検証されない根拠薄弱な理論は採用しない、という健全な実証主義の立場である。その結果、比較的多くの研究者が通説と考えがちな基本的な仮説についても異議を唱え、より妥当な異なる説明を求める。その主張をまとめると、以下のようになる。

- (1) 個別言語には、語の意味特性に還元できない純粋に統語形式 (構造) 上の規則が存在する。
- (2) 音形のない機能範疇などを多数含む抽象的な文構造は、十分な根拠がなければ設定しない (例えば、根拠が薄弱である AgrP/NegP/vP 等は仮定しない)。
- (3) 非顕在的移動 (=LF 移動) は、過剰生成する理論装置であり、廃止すべきである。
- (4) これまで統語現象と考えられてきた現象も、統語構造上の規則性から予測できないものは、他の仕組み (意味的制約、音韻的制約、文処理制約) で説明すべきである。

2. Xバー原理と主要部投射の原理について、著者はまず、それらが統語分析を間違った方向へ誘導する問題のある仮説であると批判する。そして、個別言語の統語構造上の規則性を最大限明確に表現するためには、個別言語の句構造規則を設定する必要があると主張する。Xバー原理は、言語習得上のコストがかからない無標の構造として必要であるが、個別言語の規則性は、句構造規則無しには捉えられない。このように、Xバー原理を有標性理論の中に位置づけるという接近法は、この原理が提唱された時点での洞察であったが、その後の理論展開の中で、句構造規則の廃止という異なる方向へ進展してきた経緯がある。

英語の経験的事実においても、「主要部の意味特性により句構造が予測できる」とは言えない例がある。例えば、他動詞ではないのに「目的語位置」に虚辞要素を含む場合 (rough it/ cool it/ wing it, etc.)、同族目的語構文、(自動詞の) 結果構文、などである。英語では、